

『万葉集』はこれまでどう読まれてきたか、
これからどう読まれていくだろうか。

品田悦一

通念の虚妄

『万葉集』は、しばしば「日本文化の源流」だの「日本人の心のふるさと」だのと形容されるが、多少反省してみれば分かるように、実は古代の貴族たちが編んだ歌集であつて、奈良時代末に成立してから一千年以上というもの、列島の住民の大部分とはおよそ縁のない書物だつた。現在のように広汎な愛着を集めるのは、どう遡つても明治中期以降のことだ。

かく言う私は、これでも万葉学者の端くれである。私の同業者には『万葉集』を文字通り「日本文化の源流」「日本人の心のふるさと」と信じたがる向きが多いから、私の物言いはあちこちで反感を買っているに違いないのだが、公然と反論されたことはまだ一度もない。私は証拠を洗いざらい調べ上げて発言してきたので、感情的な反撥だけは大刀打ちできそうもないと敬遠されているのかもしれない。

「多少反省してみれば」と右に書いた。多少反省してみよう。江戸時代の一般庶民——長屋の熊さんや八つあん、お百姓の世兵衛さんたち——は、『万葉集』を読むことがあつたらうか。それ以前に、

そもそも世の中に『万葉集』という書物があることを知っていたらうか。

なるほど江戸時代には『万葉集』の大版テキストが販売されていたし、国学者たちは精出して『万葉集』の研究や注釈に取り組んでいた。が、そういう仕事に従事したり、その成果に接したりしたのは、知的特権に恵まれた公家や武家の人たちが、さもなくば僧侶や神職、せいぜい豪農の檀那衆であつて、熊さんたちではなかつた。江戸庶民のリテラシーは意外に高かつたのだと言いたがる人たちのために付言すれば、庶民相手の寺子屋で『万葉集』が誦じられたという話はまったく聞いたことがない。

『万葉集』の国民歌集化

反省は済んだから、話の出発点は共有していただけたものと思うが、念のためもう一段階遡つて、出発点のそのまた前提を確認しておこう。江戸時代の熊さんたちは日本国民ではなかつたという一件である。

戊辰戦争に際し会津攻略を指揮した板垣退助が、あつけない勝利に胸を撫で下ろすをばからざつたとしたという逸話がある。会津の民百姓が誰も戦いに参加しなかつたばかりか、中には駆擧稼ぎのため
に官軍側の下働きを申し出る者までがいた。これがかもし日本対外国の戦いだつたらどうなつていただ
とだろうか——そう思い至つたのだという(『自由党史』一九一〇年、岩波文庫版一九五八年)。この教
年後、福沢諭吉も同様の考えを公にする。日本の社会では治者と被治者とが水と油のように分離して
おり、国の独立を賭けた戦争にも被治者はおよそ無関心であると慨嘆し、「日本は政府ありて國民な

「万葉集」はこれまでどう読まれてきたか、これからどう読まれていくだろうか。

しと断言したのは(『文明論之概略』一八七五年、岩波文庫版一九九五年)。

国の成員がみな進んで国に奉仕しようとする状態、つまり國民としての自覚を有する状態を作り出さなければ、列強に伍して独立を保つことなどおぼつかない——西洋諸國の事情に通じた知識人たちは、維新の前後からそう痛感していたのだが、当初は軍隊や工場の創設など、ハード面の近代化で一杯だった。ソフト面でも近代的な学校教育が開始されたとはいえ、学校で学んだ人たちが世の中に出るまでにはかなりのタイムラグがあった。

それが、維新後十数年を経て一八八〇年代を迎えると、國粹保存主義と呼ばれる思潮が巻き起こる。人々に文化の共有を自覚させることを通して、広汎な國民的一體感の醸成が目ざされたのだ。文芸分野では「國詩」——國民全体に共有され、その精神的統合に寄与する詩歌——の創出が叫ばれ、その指針として次の四点が繰り返し唱えられた。新時代にふさわしい複雑雄大な内容を盛り込むために、①詩形を長大にし、②用語の範囲を拡張すること。そして國民的普及を可能にするために、③表現を平明にし、④過剰な修辭や擬古的措辭を排すること、である。

『万葉集』が國民歌集(國詩の集)として見出されたのも、まさにこの脈絡においてだった。新体詩の出現とともに和歌の存在意義が全否定されかけたとき、その立て直しを図った人々によって國學和歌改良論が展開される。國學の素養を身につけた彼らは、和歌は狭隘短小で使い物にならぬとの非難を是認する一方、そうした非難は平安時代以降の墮落した和歌にこそ妥当するのであって、和歌の本源である万葉の歌々はこの限りではないのだ、と口々に反駁する。彼らに言わせれば、上記の指針①は万葉の長歌がとくに先取りしていたし、②に関しても万葉には少数ながら漢語を使用した先例がある。③④にしたところで、万葉のことは当時の普通語で、表現も率直そのものだというわけ

だった。

『万葉集』はこうして、きたるべき國詩の古代における先蹤と見なされていった。“天皇から庶民まで”の作者層と“素朴・真率・雄渾・真率”な歌風という、後々まで通念となる二つの特徴がこの扱いを根拠つけたのだが、これらは二つとも、國民的一體感の喚起という目的に沿って見出され、誇張された特徴——つまり作られた特徴にはならなかった。

『万葉集』を國民歌集とする通念には、実は二つの側面がある。

- ① 古代の國民の眞実の音があらゆる階層にわたって汲み上げられている。
- ② 貴族の歌々と民衆の歌々が同一の民族的文化基盤に根ざしている。

①を「万葉國民歌集の第一側面」、②を同じく「第二側面」と呼ぶ。第一側面は明治中期に、第二側面は明治後期に形成されて、互いに補い合いながら普及し、昭和初期までに日本人の一般常識と化した。

第一側面が形成された当時、和歌は文筆の所産と目されていたから、『万葉集』に庶民の歌があると主張するのは、地べたに翼を敷いて暮らす人々に読み書きができたと言ひ張るようなもので、明らかに非現実的だった。この点を取り繕う役割を果たしたのが第二側面である。「明治後期國民文學運動」と私の呼ぶ實際的運動の渦中で、國民の一體性の根柢をフオルク(ドイツ民族/民衆)の文化に求める思想がドイツから移植され、『万葉集』に導入された。具体的には、卷十四の東歌や他巻の作者不明歌に、「民謡」つまり(民族/民衆の歌謡)という概念がほとんど無媒介に適用されてい

『万葉集』はこれまでどう読まれてきたか、これからどう読まれていくだろうか。

たのである。短歌は自然発生的な民謡の一形式と見なされるときも、貴族たちの創作歌を含む万葉歌全般の基盤が民謡に求められていった。大正期には、東歌は民謡ではあるまいとの反対意見も現れるのだが、『万葉集』をあくまで民族的文化と捉えたい人たちが、懐疑の声を寄つてたかつて掻き消してしまふ。

注意しておきたいのは、ドイツ語で「ユン」の概念は王侯貴族を排除して成り立つのに対し、この概念と接触して成立した日本語「民族」の概念には「天皇から庶民まで」の全体が包摂される、という点である。ドイツ流の「ユン」理解においては、支配層は文明という普遍的価値と引き替へに民族性を喪失した人々であつて、被支配層の文化こそが固有の民族精神を具現するとされたのだが、日本流の「民族」理解では、支配層と被支配層との対立が骨抜きとなつて、両者の文化的連続性ばかりが強調されることになつたのである。民謡を創作歌の基盤とする了解は、この、近代日本特有の「民族」概念と表裏一体だつた。

アララギ派の万葉尊種

正岡子規が「歌よみに与ふる書」を新聞『日本』に連載し、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ祭に有之候」と決めつけたのは、一八九八(明治三十一)年の二月から三月にかけてである。このとき万葉国民歌集の第一側面はもう出来上がつていたし、師範学校のカリキュラムにもすでに導入されていたから(中学校では一九〇二年から導入)、子規は、かつてそう自されたような、近代における「万葉再発見」の功労者ではない。とはいへ、子規とその門弟たちが「写生」と「万葉調」

を旗印に活動したことは紛れもない事実であり、そのことが端緒となつて後のアララギ派の隆盛が導かれたことも間違いない。

一九〇二年に子規が亡くなると、その翌年、遺稿たちの手で歌誌『馬酔木』が創刊される。伊藤左千夫率いるこのグループは、極端な万葉模倣に走つたため、他派からは時代錯誤の擬古派と冷笑され、五年後に後継誌『アララギ』を発足させてからしばらく足踏みを続けた。が、一九一一年に斎藤茂吉が編集を担当したころから面目を一新、一九一三(大正二)年に左千夫が没し、茂吉が第一歌集『赤光』を刊行したころからは会員も俄然増加して、その三年後には歌壇を睥睨する最大結社へと急成長を遂げる。

当時『アララギ』の編集責任者だつた島木赤彦は、一九一六年の短歌界を振り返つて「一般の歌風の今年に至つて益万葉調を懸ふに傾いた事は争はれぬ事実である。予は躊躇なく之をアララギ調の流行といふ」と發語した(『読売新聞』一九一六年十二月十五日。原文総ルビ)。実際、このころはアララギ以外の結社でも何人も歌人が万葉歌の評釈を手がけており、歌壇はおしなべて万葉尊種の空気に包まれていた。アララギはこの気運に乗じて組織を拡大した格好だが、気運そのものを作り出しただけではない。

では、何が気運を作り出したのか。各種中等学校の卒業生、つまり学校で『万葉集』の価値を教えられた経歴をもつ人の累計は、このころすでに数十万人に達していた。万葉尊重を擬古趣味とは思われない人々が広汎に育つてきていたのであり、この背景人口こそ、尊種を下支えする基礎的条件だつたと見てよいだろう。

アララギの歌壇制覇を裏面で支えたのは、看板歌人の茂吉よりもむしろ、いま名前を挙げた赤彦

【万葉集】はこれまでどう読まれてきたか、これからどう読まれていくだろうか。



図1 島本 赤彦 (1876～1926)。長野県で小学校の教員を務めた経歴があり、歌人としての顔と教育者としての顔を使い分けなかった。

だった。彼は『万葉集』は祖先の素朴な感情生活の所産であり、複雑に分岐した文明社会に生きるわれわれにとつて常に立ち返るべき原点であつて、とまずれば枯渇しかな活力の供給源でもある、と機会あることに説いて回つたが、論調にはかなりの振れ幅があつた。当初は「万葉集は真摯そのまゝを師らず包まず其儘に歌つてゐる」(『万葉集に見る新年歌』一九〇八年一月、全集3)などと発言し、國民歌集観第一側面立つて万葉歌の純真さを評価していたのだが、大正後期、歌人として円熟期を迎へると、実作で目ざした理想の歌境を『万葉集』に投影するようになっていく。

一例を挙げよう。赤彦は、山部赤人の一首、

み吉野の象山かみよしのぞうさんのまの木末こゝろにはこども騒わらぐ鳥とりの声こゝろかも (巻六・九二四)

をこう絶賛した。「一首の意至簡にして、澄み入るところがおのづから天地の寂寞相に合してゐる。騒ぐといつてかえつて寂しく、鳥の声が多いといつていよいよ寂しいのは、歌の姿がその寂しさに調子を合せ得るまでに至純であるためである」(『万葉集の鑑賞及び其批評』岩波書店、一九二五年)。この批評は当時広く受け入れられたのだが、よく考えるところがある。なにしろ右の歌は、長歌に付属する反歌一首の一首めであつて、一連の主題は聖武天皇の吉野行幸を讚美する点にある。雖

宮を取り巻く清浄な景観を讃え、大宮人の永遠の奉仕を誓う長歌に続くものとして、この「み吉野の」の歌が配されているのだ。それが寂しい歌ではまずくないだろうか。「こども騒ぐ鳥の声」は文字通り賑やかな声であり、聖地吉野が生命の営みに満ち溢れていることの象徴と読むべきだろう。赤彦に限らず、アラキ派が主導した近代的万葉享受には、歌を本来の作歌事情・制作環境から切り離して、近代歌人の作る叙景歌や抒情歌のように取り扱う傾向があつた。晩年の赤彦はまた、『万葉集』理解の比重を國民歌集観第一側面に移し、「大民族歌集」上古日本民族全体の全人格的生産物であつて、その間に貴賤貧富男女老若の差別がない(『万葉集一面観』一九二〇年四月、全集3)といった発言を繰り返すようになる。かくて大結社アラキの共通理解となつた彼の万葉観は、大正末期には、岩波書店の出版事業に代表される教養主義の思潮とも結びついて、広く読書人に浸透していく。

空前の万葉ブームと時局の荒波

ヨーロッパ諸国が第一次大戦以来の精神的混迷を引きつづけていたのとは対照的に、昭和初期の日本には、長らく目ざしてきた近代化が達成できたとの自負が漲つており、もはや西洋に学ぶことなどないと極論する者までが現れていた。文学者や知識人のあいだに日本回帰の思潮が醸成されたことを背景に、『万葉集』はますます人々の愛着を集め、日本文化の優秀性や日本人の民族的美質といつた自己愛的想像を呼び寄せていく。千二百年以上前の祖先がみな一脈の詩人だつた民族。それを可能にする簡素な詩形を大切に守り伝えてきた民族。折々の喜びや悲しみや苦悩や希望をその詩形に託し、

『万葉集』はこれまでどう読まれてきたか、これからどう読まれていくだろうか。

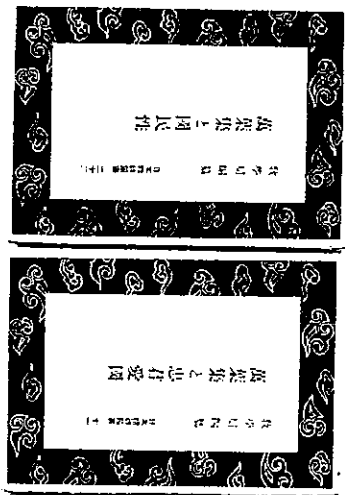


図2 『日本精神選出』。当初は四六判だったが、用紙不足のためか、中途から文庫版に縮小して刊行された。ここに掲げたのは後者

深い共感で繋がれてきた民族——国民歌集第二側面の完成形態であるこの想像のもと、空前の万葉チームが到来した。

職業的な万葉学者が輩出し、校本や総索引など、研究上有益な基礎的著作を相次いで公刊していった。靡伽で信頼性の高いテキストが普及する一方、複数の注釈が競作され、文献学的研究をはじめとして歌人論・編纂論・地理・植物・動物・染色など、万葉と名の付くあらゆるテーマが研究対象となっていく。

専門家ばかりではない。家庭婦人向けの月刊誌『主婦之友』が万葉秀歌の大々的な人気投票を実施したのもこの時期で（一九二七年一〜九月）、景品は著名日本画家五名の下絵を木版画にした「特製万葉かるた」だった。さらに、斎藤茂吉の大著『柿本人麿』（全五冊・一九三〇〜四〇年、岩波書店）は一九四〇（昭和十五）年五月に帝國學士院賞を受賞したし、『万葉集』の現代版を作り

うとの企画には実に四十万近い応募があった（『新万葉集』全十一冊・一九三七〜三九年、改造社）。

チームの総仕上げとも評せる事象だろう。

ところがそれだけでは済まなかつた。國威発揚・戦意高揚を狙う国策のもと、『万葉集』は『古事記』『日本書紀』と並ぶ軍国日本の聖典に祭り上げられていったのである。思想当局・文部当局

が推進し、多くの学者・文化人が迎合することで加速されたこの動きは、「國体明徴」が叫ばれた一九三五年以降、露骨きわまるものとなる。文部省作成の国策宣伝パンフレット『日本精神叢書』（一九三五〜四三年）、『国体の本義』（一九三七年）、『臣民の道』（一九四一年）などに、特定の万葉歌が繰り返し掲げられて、日本人が先祖代々発揮してきた忠君愛國精神の例証とされていた。この宣伝には小学校の国語教科書も巻き込まれたし（第四期国定教科書、通称「サクラ読本」、一九四一年十一月に日本文学報国会が「愛國百人一首」を選定した際には、百首中二十四首までを万葉歌が占めた。

もつとも頻繁に宣伝されたのは次の二例だろう。

今日よりは返り見なくて大君の體の御橋と出で立つ吾は（卷二十・四三七三）
海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、返り見はせじ

第二例は下野國の防人、今奉部与會布の作で、〈賤しいわが身だが、防人となつたからには体を張つて大君をお守りするぞ〉と忠勇の心意気を歌い上げる。第二例は大伴家持の「出雲詔書を賀する歌」（卷十八・四〇九四）の一節であり、武門の家柄である大伴氏に代々語り継がれてきた詞章を引用した箇所。〈海に山にわが骸をさらすことも厭わなむ〉と天皇への絶対随順を言立てるこの一節は、一九三七年に「国民歌謡」として作曲され、太平洋戦争中は國歌に連する「國民歌」に指定されて、公的会合における歌唱が義務づけられた。

『万葉集』四千五百余首のうち、四割以上は男女の交情をテーマとする相聞歌である。が、それらは

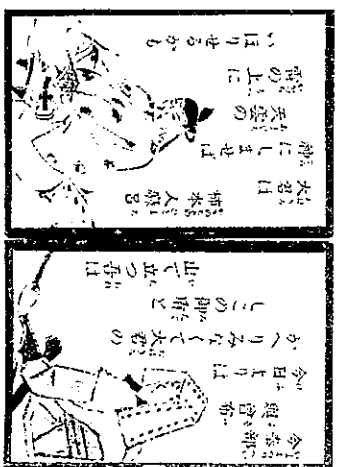


図3 愛国百人一首カルルカ。何處か出回つたうち、これは麻み
札が絵入り・色刷りの珍版本で、定価2円80銭（日本玩具
社刊行）。単色の普及版は定価1円が相場だった。

一切黙殺された。百首近くある防人歌にしても、大多数は家族とのつらい離別を歌った作だが、それらも奏通りされた。「今日よりは」のような勇ましい歌は、防人歌はおろか『万葉集』全体でもごく僅かしかないのに、そういう例外的な歌をことさら取り上げ、戦争遂行に利用するという、恣意的かつ一面的な扱いがまかり通っていたのである。

荒波をやり過ごして

一九四五年八月の敗戦を受け、国民学校国語教科書の第六学年用単元『万葉集』は墨塗りの対象とされた。日本六学年用単元『万葉集』は墨塗りの対象とされた。日本文化を全否定する言論の横行に伴って、『万葉集』を平和日本建設の障害物のように見なす言説が一時流通するが、この状態は長くは続かなかった。文部省教務局的『万葉集』、日本文学報国会的『万葉集』は關に葬られ、代わって、昭和初期までに一般識化していた万葉集が息を吹き返していったのだ。日本人の民族的美質の表象としての万葉集である。

復活した『万葉集』は、高度経済成長期から安定成長期にかけて、二度めのブームを迎える。岩波書店の『日本古典文学大系』に収録された四冊本『万葉集』（一九五七〜六二年）が売れに売れ、犬養孝や中西進といったスター学者の活躍により一般愛好家の裾野が広がって、各種カルチャーセン

ターには万葉の講座が必ず設けられる。

世紀の変わり目こそ、この状態に変化が現れる。世界が大小の国民国家によって分割されている状態が揺らぎ始めたのを機に、『万葉集』に対する国民的愛着を批判的に分析する研究が現れた——こゝ書くと、自身の業績の先駆性を誇称することになってしまうが、それは本意ではない。私か右の研究に着手したのと軌を一にするようにして、当の愛着がめつきり色あせてきたのだ。若い世代は『万葉集』に背を向けるようになり、学会の会員はみるみる減り始めた。研究も享受も世代交代が進まな

いまま、沈滞に陥りつつある。

だが、禍福はあざなえる縄と評すべきだろうが、国民的愛着などとは無関係に『万葉集』と付き合いおうとする人たちが着実に増えてきた。最たる例は外国人の研究者たちだ。北米では、刮目すべき研究成果がすでに挙がっている。『万葉集』を七八世紀の東アジア世界に流通した帝國的想像の一斑と見定めただけで、テキストとしての特質に肉薄する研究である（Torquii Diethe, *Manyōshū and the Imperial Imagination in Early Japan*, Brill, 2014）。

『万葉集』の愛読者は、日本では今後とも減少の一途をたどるだろう。それでもいいと私は考えるようになった。信仰にも似た愛着とすつばり縁を切つたとき、私たちは初めて『万葉集』と冷静に向き合えるようになるのだと思う。

プロフィール

品田悦一（しなだ・よしかず）

一九五九年、群馬県生まれ。一九八八年、東京大学大学院人文科学研究所博士課程修了。聖心女子大学文学部教授などを経て、現在東京大学教授（大学院総合文化研究科）。稀代の奇書『鬼髓先生かく語りき』（書肆社、二〇一五年）の編者でもある。

読書案内

◇神野志隆光・坂本信幸編『セミナ―万葉の歌人と作品』（和泉書院、全十二巻、一九九九―二〇〇五年）

*一九八〇年代以降の研究成果をふまえ、個別の歌人と作品に即して解説したシリーズ『万葉集』を読むための手引きとして最新・最薄。

◇品田悦一『万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、二〇〇二年）

*目下適用している『万葉集』像が明治中期から昭和初期にかけて形成されたことを具体的に論証。

◇品田悦一『斎藤茂吉―あかかと一本の道とほりたり』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）

*『万葉集の発明』で展開した主張を、『万葉調の国民歌人』と目されてきた斎藤茂吉の生涯に即して具体的に掘り下げる。